

中国の小学校における漢字交流授業の開発

陳 卓君¹⁾

千葉大学大学院人文社会科学部 博士後期課程¹⁾

国際理解教育が盛んである現代社会では、各国・各地域間の相互理解や協力を推進できる国際感覚をもった人々が不可欠である。しかし、中国では、小学校レベルの国際交流も確かにあるが、校数も少なく、国からの支援も限られている。このように、中国の子どもたちは異文化を体験する機会が不足している。本研究は、日本と中国の漢字文化に関する知識習得を中心とし、インターネットの Skype というソフトウェアを使った日中両国の小学校で国際交流授業プログラムの開発を試み、国際理解教育及び異文化間教育の観点から授業の有効性や改善点を明らかにした教育実践研究である。この授業プログラムは、日本と中国の漢字の学習-漢字の活動-漢字の交流という流れに焦点をあて授業を行うものである。なお、主に中国側を中心とした授業を対象に分析し、検討する。その結果、子どもたちが日中の漢字文化を知り、交流を通してお互いに理解することができたが、課題として授業内容の工夫やインターネットの接続状況を改善しなければならないである。

キーワード：異文化間教育、国際理解教育、遠隔交流、漢字文化、授業実践

1. 問題の所在

1.1. 中国の学校教育における国際理解教育の現状

経済高度発展期にある中国は、世界各国に注目されており、国際的影響力もますます増大している。特に WTO への加盟 (2001 年)、北京オリンピックの開催 (2008 年)、上海万博 (2010 年) の開催に象徴されるように、中国の社会経済発展はより一層国際的になり、人材育成に関して優れた外国語能力と豊かな科学文化知識や国際理解意識を持つ人材を育成することが学校教育に対して要求されている。このように、現在の中国の教育の分野においても国際理解教育が強調されはじめている。

蔡秋英 (2010)¹⁾によると、現在、中国は、主に次の 3 つの形態で国際理解教育を行おうとしている。

第 1 の形態は、既存の教科、特に道徳や外国語などの中で、教科目標の一部として行われている国際理解教育である。このような取り組みは中国では「浸透教育」と呼ばれている。この形態は学校の中で国際理解教育を行う際の主流となっているのが現状である。しかし、この形態は、教授内容が各教科の中で分散してしまうため、国際理解教育を集中して行うことが難しい。また、教授活動については従来の伝統的な教授方法の影響を受けやすいなどの問題点が指摘されている。

第 2 の形態は、基礎教育課程改革によって、子ども

たちの活動や体験を重視する領域として小学校 3 学年から高校 3 学年までに新設された「総合実践活動」の中で行われている「集中型」の国際理解教育である。2001 年秋から、中国における義務教育カリキュラムの改革が指定された地域から始まった。従来のカリキュラムの枠の中に、総合実践活動が増設された²⁾。

中国のカリキュラムについて簡単に説明しておく。中国の小・中学校のカリキュラムは、国家カリキュラム・地方カリキュラム・学校カリキュラムの 3 段階に分けられており、地方や学校に一定のカリキュラム設定の自由度が与えられている。したがって各地方は、その地域の教育需要にあわせて地方カリキュラムの開発に着手している。³⁾

例えば、小学校における「総合実践活動」において扱われている学習の領域の中には、国際理解教育に関連する内容がある。国際理解教育は、各領域で表 1 の内容を扱うことになっている。

表 1 「総合実践活動」の学習の領域 (国際理解教育)⁴⁾

領域	具体的な例
自然環境問題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水土流失 ・ 気候の影響 ・ 植生被覆 ・ 水資源の状況 ・ ゴミなど総合的な環境問題など
社会問題及びその歴史と現実	<ul style="list-style-type: none"> ・ 世界文化遺産 ・ 中国と世界の経済及び文化生活など
伝統文化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中華文化と世界各民族の文化など

Zhuojun CHEN¹⁾: Development of A Teaching Program for the International Exchange to Chinese Characters in Chinese Primary School

¹⁾ Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University

地球的課題	・地球的課題とその課題解決のための情報技術、メディアなど。
-------	-------------------------------

第3の形態は、地方や学校の中で国際理解教育関連のカリキュラムを開発し、更に「国際理解」という教科を新設して行われている「特殊型」の国際理解教育である。つまり国際理解教育の専門的な教育課程である。研究者らは国際理解教育モデルやカリキュラムの構築を試みている。その一例として示したものが表2である。この表は、イギリスウェルズ大学の翁文艶の論文「国際理解教育カリキュラムの構築」により整理したものである。

表2 中国の国際理解教育カリキュラムの構造⁵

構造	目的	主要内容
1 国際理解教育の基礎	異なる文化に対する理解と尊重の態度を育成し、「地球市民」意識と国際的資質を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・人と交流する基本的技能 ・世界の基本問題（平和と発展問題、生態環境問題など） ・国際機構と平和の維持 ・多文化共存 ・世界の相互依存関係 ・国際交流と協力
2 中国の事情と特徴	民族の自尊心と誇りを持ち、自国文化の理解に基づいて、他国の人々と仲良く平等に交流し、民族の平等意識と団結協力の精神を持つようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・中国の国情 ・中国の伝統文化及び世界文化における役割 ・近年における中国の国際的地位の上昇 ・中国と世界各国の交流と協力
3 学習方法	自尊心を持つとともに、全面的に発達した人格を形成し、世界を正しく認識して、地球的問題を正しく分析し解決する能力を高めるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・教授活動において、新課程標準で提唱している自主的学習、探求学習、協同的学習などを取り入れる。
4 学校と地域の連携	各地域の特徴に結び付け、子どもたちの現実生活と密接に関わる問題や課題を取り上げ、実際の生活の中で国際理解を体験することを重視する。	

これら3つの形態以外に、もう1つ別の形態がある。それは授業中の活動の実施には制約が多いため、授業以

外で多様な活動を実施するという形態である。例えば、中国無錫市新区旺庄実験小学校では、「学校内の文化環境を国際的雰囲気にする」、「課題研究を新しく作り、教育実行力を高める」、「教師全体の素質を高める」、「共同研究、交流を深め、国際的空間を拡充する」という4つの方向から国際理解教育を実施している。⁶そのうち「共同研究、交流を深め、国際的空間を拡充する」という点については、主に「韓国、シンガポール、イギリスなどの海外の学校との協定交流を広げる」、「毎年教師と生徒を組織し、イギリス、シンガポール、韓国などへの訪問を行い、海外の教育資源に触れ、自国の文化も広め、互いの文化を融合し、国際的視野を広げる」、「定期的に無錫にある韓国人学校と交流活動を実施し、イギリスの小学校とインターネットによる交流をし、無錫で韓国の生徒の留学を受け入れ、また、生徒たちの活動を開放的に行なう」という内容である。⁷

これまで国際理解教育の4つの形態を取り上げたが、全体として中国における国際理解教育の主流は、「愛国主義教育の一環」として、「国際社会に対する理解を深めることにより、自国民としての自覚を持たせる」と同時に、「国際社会、国際関係、外国文化などに関する学習を通して国際意識の向上を図っている」ものである。⁸それだけではなく、愛国主義、自文化理解を通じて国際理解に至る、という立場もあるのである。これはまさに、日本では文部科学省が提唱する、「自国の伝統文化の尊重を基に、異文化へのまなざしを形成することで国際理解を促進する」⁹という立場と通じるものである。

1.2. 中国の学校教育における国際理解教育の問題点

国際理解教育の現状について述べてきたが、国土も広く、発展レベルも不均衡でグローバル化への取り組みも地域差が大きい中国であるため、国際理解教育の実施にも大きな地域差が生じてくる。

陳（2013）によると、中国の上海の小・中学校が自ら組織した国際交流活動も多い。例えば、上海中学校は毎年「ハーバード大学英語キャンプ」を開催し、ハーバードの大学生を迎えている。上海市嘉一連合中学校の生徒は日本の大阪府八尾市立竹淵小学校、八尾市立亀井中学校を訪問し、児童や生徒との交流を進めている。全ての上海の小・中学生が国際交流をしているわけではないが、国際交流に関わる子どもたちの数は他の都市と比べて非常に多い。¹⁰現在中国の北京、上海、浙江省などの地域の小中学校では、国際理解教育に盛んに取り組んでいる。

上海などの地域は昔から地理的条件に恵まれていて、外国から人が来たり、上海の人が外国に行ったりと、交流がしやすく、国際交流が順調に進んでいる。しかし、他の地域、特に貧困の地域の子どものについては、国際交

流が盛んとは言えず、国際理解教育も実施することができていないという事実がある。

では、他の地域（特に重慶などの内陸地区）はいかにして国際交流を実現できるのだろうか。一つの方法としてインターネットなどの通信技術がある。インターネットなどの通信技術を用いれば、物理的距離が離れていても交流することができる。また、文書だけでなく、動画や音声データの編集や保存、共有なども簡単にできるようになっている。教育においても、他国と交流する機会を生み出すことが可能となる。そのため、地理的な条件に恵まれていない地域であっても国際交流が可能となる。つまり上海であっても重慶であっても、インターネットなどの通信技術があれば、より多くの子どもたちが国際交流の活動に参加することができ、都市間の国際交流に関する格差も小さくすることができると考えられる。

2. 日中の国際理解教育及び漢字の役割

2.1. 小・中学校における日中交流の意義

中国と日本の経済発展ともなって、21世紀において文化の発展も重んじられるようになってきた。日本と中国との文化交流はますます頻繁になってきている。異文化交流は中国と日本の絆となり、重要である。

両国の関係には、戦争や侵略という不幸が起きたこともあれば、文化や人の交流といった積極的な面もある。特に、教育においても、日中が互いに理解し、学習し、国々の文化を分析、思考し、積極的に共存することができるようになるための授業プログラムを生み出していく必要があると考える。

最近、日中間では小・中学生を対象とした教育交流が盛んに行われている。都市間での交流事例の他、友好都市間以外での交流事例も増えつつある。しかし、学校や地域政府が主導する交流事業が盛んに行われているものの、その交流の機会に恵まれるのは一部の人間に過ぎず、十分な交流を行われていないということである。

2.2. 漢字について

日本と中国との間に2000年余りの交流があるということは周知の事実である。特に「漢字」に関する交流は、昔から日本、中国を中心とした地域それぞれの文化の形成、発展そして地域間の政治的な接触、文化交流において極めて大きな役割を果たしてきている。

しかし、中国の教育現場において、漢字が置かれている現状は非常に厳しいものである。中国教育部も「漢字健忘症」にかかっている学生の増加を指摘した。¹¹その原因の1つとして受験戦争文化が挙げられ、子どもたちの頭の中が「数字と英語でいっぱい」だからだと分析

した。さらに重要なことは、中国の若者が過度に電子機器を使用するため、漢字を手で書く機会がますます減少している点である。¹²同じ時代で、漢字の伝統文化をさらに発展させる国は中国ではなく、まさに日本、韓国ではないだろうか。現在の中国の若者に求められているものの一つには、自分の言葉についてきちんと認識し、漢字の歴史、発展などの知識を学校で学習することがあるのではないだろうか。

3. 研究の目的と方法

3.1. 研究の目的

本研究では、小学校における子どもたちが日中の漢字文化のつながりを理解し、漢字の活用を考え、交流することを目標として、インターネットの Skype（インターネット接続を通じて、世界中のユーザー同士で、通話や画面の共有、テキストメッセージの送受信などができるサービスである。）というソフトウェアを使った日中両国の小学校で国際交流授業プログラムの開発、実践、考察により、その成果と課題を明らかにする。

3.2. 研究の方法

本研究は、以下の手順で進める

- (1) 授業プログラムの開発に向けた事前資料の収集
- (2) 授業プログラムの開発
- (3) 子どもへの事前アンケートの実施
- (4) 授業プログラムの実施
- (5) 子どもへの事後アンケートの実施、担当教諭へのヒアリングの実施
- (6) 研究の成果と課題の考察

4. 授業の計画

4.1. 授業プログラムの概要

基本的な授業の構成は陳（2013）の実践授業と同様とする。具体的な内容については、陳（2013）の実践授業「小学校5年生における日中遠隔交流授業」という授業の計画を参考にし、ビデオ鑑賞→興味を持ち→楽しく生活について交流・学習という学習のデザインを工夫・改善する。その結果、今回の授業プログラムでは、日中の漢字の学習、漢字の活動、漢字の交流という3つの流れに焦点をあてた授業を開発する。日本と中国の漢字文化を理解するため、授業の内容は「中国と日本の漢字の由来、特徴、発展」、「中国と日本の漢字の活動」、「漢字について中国と日本の遠隔交流」、「日中交流のまとめ」という4つから構成される。

4.2. 本授業プログラムを開発する上での工夫

本授業プログラムを開発する上で、工夫した点は次の3つである。

- ① 漢字に対する意識を調査するため、漢字についてのアンケートを用意する。例えば「漢字と言われて思い浮かぶこととは何ですか」などの質問である。
- ② 漢字の知識を小学校の子どもたちに伝え、それを子どもたちが楽しく学ぶため、漢字に関するゲーム及び漢字基礎を紹介する教材(漫画、写真)を用意する。なお、教材の作成にあたっては、子どもたちの漢字習得の手助けとなるように、子どもたちが理解しやすい内容を抽出・整理する必要がある。また、第1時間目の学習に対する集中度を落とさないように、様々な仕組みを用意しておく。例えば、漢字の歴史を紹介しながら、クイズを出す。授業の中で、選択型の問題形式を出しながら、楽しく学習ができるように作成する。
- ③ 漢字の活動について、筆者は新しい漢字を作るといった活動を考えた。日本と中国は一部の漢字については共通しているが、日本語の片仮名、中国の表音文字は異なっている。それらの部分の言葉が通じ合うようにするために、中国の表音文字から表意文字への変換や、日本の片仮名から漢字に変換することができる新しい漢字作成活動を開発した。漢字を調べたり、漢字を作ったりする体験を通して、漢字の魅力を感じられることができ、創造力も発揮できるようになる。さらに、最後の交流授業の時、お互いに作った新しい漢字を相手に発表し、相手国の漢字と自分で作った漢字を観賞し、理解する。

4.3. 授業計画

授業の計画は以下の通りである

実施校： 中国重慶市謝家湾(金茂)小学校

学年： 小学校5年生1クラス47名

時	学習活動	評価基準
1 時 間 目	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の起源、発展について学ぶ ・日中漢字の交流に関する歴史を説明する ・日本と中国の漢字の発音・意味・字形について比較する 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字についての学習を通して、漢字のよさや面白さを感じ取ることができる ・日本と中国の漢字を理解することができる
2 時 間 目	<ul style="list-style-type: none"> ・中国語の中の表音文字の言葉を選んで、新しい漢字を創造する 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字を創造する体験を通して、漢字の魅力を感じられることができ、創造力も発揮することができる

3 時 間 目	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい漢字を発表する 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字について楽しく交流することができ、漢字の大切さを感じられる。お互いに理解できる。
------------------	---	---

5. 授業の実際と考察

5.1. 第1時間目

1時間目の授業は、ほぼ授業者自身が作成したパワーポイントを流しながら説明をした。授業者が自己紹介をした後、授業を始めた。

① 導入の部分

以下、授業の様子である。授業は中国語であるため、内容を日本語に翻訳した。Tは授業者の発言、Cは子どもの発言、oは子どもや授業者の行動を表している。

T いきなりですが、皆さん、去年の今日、何を食べましたか？

C え？ 去年？ 覚えてない！ ご飯？

T じゃ、質問を変えます、今日の朝ご飯は何を食べましたか？

o 子どもはほぼ全員話している。

T 今日のははっきり覚えていますね。もし、来年の今日食べたものを覚えていられるようにするには、どうすればいいでしょうか？

C メモする、どこかに書けばいい。

C 写真を撮る。

T そうですね。わたしの方法は記録です。そういえば、わたしは去年の今日食べた物を記録しています。皆さん見てください。

o 授業者は日本語で書いている文章（今日は暑かったです。だから、温かいものは食べたくない、昼ご飯は友達と一緒に寿司を食べました。そして、抹茶アイスも食べました。美味しかったです。）をパワーポイントで示した。

C 寿司！ 抹茶！ 美味！

T そうですね、何となくわかりますね。では、皆さんにも分かりやすいように、中国語に翻訳したものがありませんので見てください。

o 授業者は先ほどのパワーポイントと同じ意味が書かれている中国語の文章を示した。

C なるほど、抹茶アイスだった...

T では、2つ国の言葉で、同じ文字は漢字ですが、違う文字はなんですか？

C 中国語は漢字だけです。

T そうですね。日本語の中では、平仮名と片仮名があります。しかも、平仮名と片仮名は漢字から生み出され

ました。今日はせっかくですので、日本と中国が使っている漢字の世界と一緒に入りましょう。

C はい!

T まず、漢字ってなんですか? 考えてください。

C え?

T では、わたしはみなさんのために、いくつかのキーワードを作りました。

その時、授業者は漢字について「約 6000 年前～4000 年前」、「中国の漢民族」、「文字」、「表記」、「表意」、「日本語や中国など」という 6 つのキーワードをパワーポイントで示した。そして、一つ一つ各キーワードを解釈した。

② 展開の部分

ここから、漢字の起源と発展の説明に入った。漢字がなかった時代について、授業者は「結縄」という概念(古く、文字のなかった時代に、縄の結び方で意思を通じ合い、記憶の便としたこと。)を子どもたちに紹介した。そして、漢字の発明者として蒼頡という人物を紹介するために、「蒼頡造字」というアニメのビデオを流した。ビデオの内容について、蒼頡は星の分布、動物の形、大自然の営みをつぶさに観察して記号を発明し、それぞれに異なる意味合いを持たせた。蒼頡が記号を使って彼の考えを人々に伝えると、人々は理解することができた。彼はそれらの記号を文字に変え、漢字を作ったと古代の書物に記録されている。また、漢字の形の変化を紹介し、「馬」と「魚」という 2 つの漢字の変化を示した。

次に、漢字の影響力を説明するために、漢字を使った国について、子どもたちに「漢字を使ったことのある国、あるいは今でも使用している国はいくつありますか」という選択肢のあるクイズを出した。多くの子どもたちは「3つ」もしくは「4つ」と答えた。そこで、子どもたちに4つ以上の国があることを紹介するため、アジア地図を使って示し、一つ一つ子どもたちとともに確認した。そして、「日本と中国のみ、昔でも今でも漢字を使っている」ということも子どもたちに伝えた。

その後、日本における漢字について「5、6世紀に漢字が伝来」、「平仮名、片仮名」、「国字」、「新しい言葉の創造」という 4 つのキーワードに基づいて簡単に紹介した。「新しい言葉の創造」については、日本人が作った漢字の言葉である「警察」を例に取り上げた。「日本で使用しているだけでなく、中国の大陸部、香港、台湾などの地域でも、幅広く使用している」ということを子どもたちに伝えた。

そして、中国と日本の漢字の共通性と相違性を説明するため、まず「中国、日本、韓国では 808 個の漢字が通用する」というニュースを子どもたちに示した。また、

「意味が同じ漢字」、「意味が少し違う漢字」、「意味が全く違う漢字」という部分に入って、日本語と中国語の漢字を比較した。具体的には、授業者は A、B、C という 3 つの列を設定し、各列の中に漢字を入れた。(図 1)「日本語と中国語で意味が同じ列はどれですか?」と質問した。その結果、ほぼ全員が正解の「A」を選んだ。そこで、授業者は B 列と C 列について詳しく説明した。例えば、B 列は中国語の意味と全く異なるので、各言葉の中国語での意味を一つ一つ説明した。具体的には、「手紙」は中国語の意味で「トイレトペーパー」であり、「娘」葉中国語の意味で「お母さん」であった。意味の違いに、子どもたちは驚き、「え? そんな!」と反応し、ショックを受ける様子も見られた。また、C 列は中国語の意味と少し異なるので、「野菜」を例に、「中国語で野生の食べられる植物」という中国語の意味を紹介した。

③ まとめの部分

黒板で貼る知識点—漢字の 6 つキーワード、蒼頡の画像、日本人作った言葉「警察」などのポイントを黒板に貼り、授業を振り返った。また、「古代は中国から日本に漢字が輸出され、また近代あるいは現代では中国が日本から様々な新しい漢字の言葉を輸入することになった」と伝えた。最後、中国と日本はお互いに良い影響を与え合うということを説明し、授業が終わった。



図 1 「意味が同じ漢字」、「意味が少し違う漢字」、「意味が全く違う漢字」のクイズ

④ 授業後の考察

授業全体を通して、授業の目標である「漢字についての学習を通して、漢字のよさや面白さを感じ取ること」と「日本と中国の漢字を理解すること」が達成されたのかを検討したい。まず、授業アンケートから見ると、「今日の授業は楽しかったですか」という質問について、89.4%(47人中42人)の子どもは「とても楽しかった」という選択肢を選んだ。また、自由記述を見ると、32

人は「日本と中国の漢字の知識を知った」と答えた。次、「『日本と中国の漢字がお互いに影響している』ことがよくわかりましたか」という質問について、87.3% (47人中41人) は「よくわかりました」と答えた。そして、「日中の漢字についてもっと興味をもち、学習したくなりましたか」という質問については、97.9% (47人中46人) の子どもが「もっと学習したいです」を選んだ。理由についての記述を見ると、「日中漢字の違いが面白い」と回答した子どもは17人、「知識を増やしたい」と回答した子どもは15人、「学習すれば日本の子どもと交流できる」と回答した子どもは10人であった。

最後に、子どもたちの自由記述から考察する。「授業が面白い、楽しかった」と書いた子どもは7人、「日中漢字について学習した」と書いた子どもは14人、「日本語も学習した」と書いた子どもは6人であった。1人の子どもは「日中文化は他に何か違う所がありますか」ということを質問した。

また、2人の子どものコメントは第1時間目の課題について問題点があることを確認させる記述を含むものであった。1人の子どもは、「日本の漢字の発音が分からない」と書いていた。今回は漢字の字形のみ紹介したので、今回は発音までは紹介していない。日本における漢字の発音も紹介する場合、どのように紹介すれば良いか、今後工夫が必要となるだろう。もう1人の子どもは、「日本の漢字の形の変化がまだわからない」と書いていた。授業者は今回のように日本の漢字を紹介する前に、日本における漢字の形や発音について細かい内容を学習しておく必要がある。それにより、子どもたちにもっと分かりやすい方法を考え、授業プランを改善することに繋がると思われる。

5.2. 第2時間目

① 導入の部分

第2時間目の授業の最初に、授業者は1時間目の内容を簡単に振り返り、その中で「日本と中国は漢字を使っていますね」ということを強調し、授業を始める。

以下、授業の様子である。Tは授業者の発言、Cは子どもの発言、oは子どもや授業者の行動を表している。

T 中国語の言葉は漢字だけでできていますね。

C そうです。

T はい。実は、日本の人は中国に行くと、中国語が分からなくても、漢字の意味が大体分かります。しかし、全然分からない漢字もあります。それは、中国語中の表音文字です。

C 漢字は表音文字？

T そうですね、第1時間目で「漢字は表意文字」とは言いましたね。しかし、現在の中国語には、西洋文

明を受けた新しい名詞が生まれています。中国語に翻訳する時、直接英文とほぼ同じ発音の漢字にしたのです。だから、その時の漢字は、表意文字ではなく、表音になりました。

o 授業者は、黒板で「問題：日本の人は中国の表音文字が分からない」と書いた。

T 日本の人は、表音文字が分からない場合、どうすればいいでしょうか？

o 子どもたちほぼ全員が黙っている。その時、1人の子どもは「漢字にする」と答えた。

T そうですね。「漢字にする」ですね。だから、今日は皆さんにお願いしたいことがあります。

o 授業者は、黒板で「使命:新しい漢字を作ろう」と書いた。

T 難しいですか？

C 分からないです。難しくありません。

T え？ すごい。難しくありません。では、今日は、日本の子どもたちでも分かる漢字を作りましょう。皆さん作り方を分かるように、私は1つ例となる漢字を作りました。

o 授業者は自分が作った漢字を出した。(図2)

C え？なにそれ？分からない。

T 下は箱です、箱の上で人に涼しい感じを与える食べ物です。

C アイスクリーム？

T そう、それは私の考えた「アイスクリーム」です。

C え？すごい。

T ありがとうございます。そして、私の考え方を皆さんに説明するために説明文も作りました。



図2 授業者が作った漢字「アイスクリーム」

その時、授業者は説明文を見ながら、「アイスクリーム」という漢字の組み合わせ、自分の考え方について子どもたちに説明した。また、作り方に関する「形を表す」、「意味を表す」、「2文字でも3文字でもok」、「説明文を書く」という4つのポイントも子どもたちに説明した。さらに、「作る時、他の班に教えないように作って、

最後、皆さんと一緒に当ててみて、正解を発表するという流れにしよう」ということ説明した。その後、授業者は「皆さんで、良い漢字を3つ選んでください。一番多く選ばれた3つの作品を作った人には、私からプレゼントを差し上げます」と言った。子どもたちは「すごい」と反応し、表情も興奮気味だった。全部の説明が終わった後、各班の代表者が授業者から1つの言葉が書かれたカードを受け取り、漢字を作り始めた。

② 展開の部分

各班は、自分のカードを見た後、ほぼ全員が悩んでいる様子だった。今回は第5班を抽出し、様子を考察する。5班では以下の場面が確認された。

5班は他の班と比べ、メンバー全員が落ち着いて、静かに進んでいた。5班が選んだ言葉は「ソファー」であった。最初、メンバー全員と一緒に相談していた。その結果、女の子Aさんは皆の意見を収集し、1人で書いた。Aさんが書いたあと、その漢字を他のメンバーたちの中で回して、「これどうですか」と聞いた。メンバーたちは全員笑って、「それは絵みたいです」と男の子Bさんが言った。Aさんはちょっと失望している様子で、書いた紙を回収して漢字を直した。直している途中、メンバー全員が注目し、全体的に協力的な雰囲気生まれているようだった。

③ まとめ部分

授業者は、各班の代表者を確認した後、1班から9班までが順番に発表を行った。5班の発表者Aさんは、紙を持ち、クラスメートの前に立ち、「ソファー」(図3)という作った漢字の紙にスクリーン映しながら「この字は何でしょう」と聞いた。作った漢字は分かりやすく、1人の子どもが「ソファー」と答えた。その時、女の子に少しがっかりとした表情が見られた。授業者は「それはいいことですよ、すぐ分かります、日本の子どもも分かりやすいかもしれません」と言った。Aさんは話を聞いた後、笑った。これから、Aさんは「ソファー」の漢字について「2つの人は、2人を表しています。軟という字はソファーが柔らかいことを表しています。下の形はソファーの形です」と説明した。授業者は「皆分かりましたか」と聞いて、クラス全員が「分かりました」と言い、拍手した。



図3 5班が作った漢字「ソファー」

各班が発表した後、子どもたちは自分が好きな漢字に投票した。票数が一番多かった3つの班(バイク、ビール、チョコレート)にはプレゼントが渡された。この後、子どもたちは授業後のアンケートを記入し、授業が終了した。

④ 授業後の考察

授業全体を通し、授業の目標である「漢字を創造する体験を通して、漢字の魅力を感じられることができ、創造力も発揮することができる」ということが達成されたのかを検討したい。まず、授業アンケートから見ると、「グループで新しい漢字を作ることができましたか?」という質問に対して、66.0%(47人中31人)の子どもが「できました」と回答し、29.8%(47人中14人)の子どもが「まあまあできました」と回答した。また、「自分の班が作った漢字がどう思いますか」という質問については、ほぼ全員は「良い漢字です」、「分かりやすい」と書いていた。「他の班の作った漢字についてどう思いますか」という質問について、「良くできていました」と回答した子どもは25人、「ある班の漢字が好きです」と回答した子どもは6人、「良い漢字もあるし、良くない漢字もある」と回答した子どもは6人、「あまり良くない」と回答した子どもは6人であった。子どもたちの多くは、自分で作った漢字について自信を持っていたといえるだろう。また、「新しい漢字をまた作ってみたいですか」という質問について、83.0%(47人中39人)の子どもは「はい、また作りたいたいです」と回答した。

しかし、「今日の授業は楽しかったですか」という質問について、51.1%(47人中24人)の子どもが「とても楽しかった」と選択していた。「あまり楽しくなかった」と「楽しくなかった」を選択した子どもは19.1%(47人中9人)であった。その理由を見ると、「自分の班の票数は少ない、プレゼントもらってない」と多くの子どもたちが書いてあった。自由記述でも、「なぜ試合をするのですか」と1人の子どもが質問していた。授業者は各班を励ますために、プレゼントを用意した。しかし、今回の授業では、一部の子どもにのみプレゼントを

配布することとなり、彼らの残念な気持ちにつながってしまった。子どもたちは、ほぼ全員が努力し漢字を作成していたため、子どもたちの「まじめにやったのにプレゼントをもらえなかった」という気持ちは理解できる。今後、授業者は平等性を考えながら、授業の実施方法を工夫する必要があると考えられる。

5.3. 第3時間目

① 授業の様子

第3時間目の授業は、多機能教室で実施した。授業者は日本側の授業者とのインターネット接続を確認した後、授業を始めた。

まず、授業者は、第1、2時間目の授業に関する知識と活動を振り返った。漢字の知識を復習した後、授業者は簡単な日本語の挨拶を子どもたちに教え、「漢字を通して日本の5年生と交流しよう」という紙を黒板に貼った。

これを受けて、子どもたちは、日本の子どもたちに挨拶した。中国の子どもたちにはカメラの向こうから、大きな声で「こんにちは」と元気な声が聞こえてきた。そして、日本の子どもたちにも中国から「ニーハオ」という声が聞こえてきた。その時、すべての子どもたちから熱烈な拍手があがった。

その後、新しい漢字の発表が行われた。発表の順番は「じゃんけん」で決めた。中国側と日本側1人ずつ子どもを指定し、カメラの前でやった。その結果、日本の子どもが勝ったので、日本側から発表するという形で順番が決まった。

まず、日本側の1班の発表が行われた。1班の子どもは、自分名前の漢字及びその漢字の意味を紹介した。その後、子どもは自分が作った漢字「カレンダー」(図4)を発表し、「この字はなんでしょう」と問題を出した。中国側の子どもたちは考え始めた。その間、日本側の担任の先生が「中国の子どもは、1班から9班まで分かれているので、回答してもらう班を1から9の中から指名してください」と指示した。20秒後、日本の1班の子どもは、中国の5班を選んだ。中国の5班の子ども1人は立って、「数字」と答えた。しかし、答えは違っていた。そして、日本側の子どもから、「どこの家にも必ずあります」というヒントを出した。中国側の子どもたちが盛り上がっている様子がうかがえた。日本側の子どもは次に中国の3班を選んだ。中国の子どもは「カレンダー」と答えた。1班の子どもは「正解です」と言い、他の子どもたちも拍手した。そして、「1から9は日付です。これを組み合わせれば、31日までの日付になります。月と日は何月何日と表せます。中国の皆さん分かりましたか」と1班の子どもは、「カレンダー」を意味する創作漢字の解釈を説明した。そして、中国の

子どもたちも「分かりました」という意味で、手でマルを作った。日本側の子どもたちはその画面を見た後、全員笑って、もう一回拍手した。このように、日本側の1班の発表が終わった。

2番目の発表は中国側からなされた。中国側の子どもは、自分たちが作った「バイク」という漢字を挙げて、「この字は何でしょう」と日本側の子どもたちに質問した。日本側の子どもたちの間で相談が始まった。日本側の子どもたちは班に分かれるのではなく、手を挙げた人に担任の先生が指名するというやり方をとった。その後、担任の先生は2人を指名し、子どもたちはカメラの前に来て、「握レバー」、「車」と答えた。しかし、答えは間違っていた。そして、中国側は「これは交通用のもの」というヒントを出した。しかし、正解を答えられる人がいなかったため、中国側は「バイク」という正解を発表した。日本側の子どもは、ほぼ全員は「あ！」と大きい声で反応し、拍手した。その後、「バイク」を意味する創作漢字について説明した。「①バイクはハンドルがあるので、手へんを付けました。②バイクは2つの車輪があるので、2つの口を書きました。③車体を表したいので、繁体字の『車』を書きました」と3つのポイントを説明した。日本の子どもたちは拍手し「しゅしゅ」(中国の「ありがとうございました」の意味)と返事した。

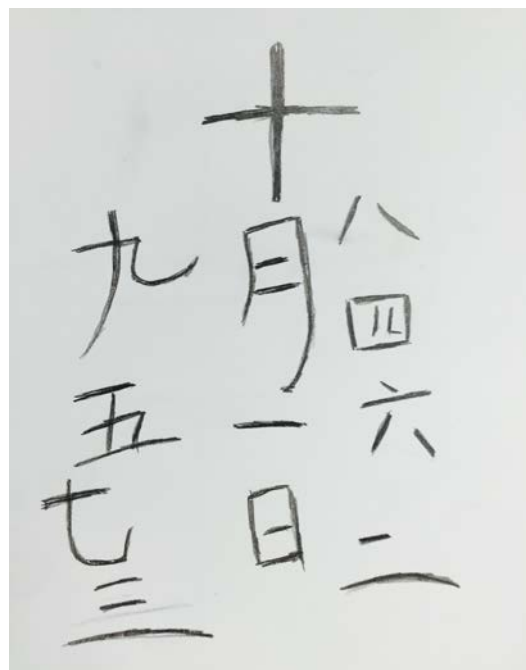


図4 日本側が作った漢字「カレンダー」



図5 中国側が作った漢字
「バイク、ビール、マイク、チョコレート」
(左上、右上、左下、右下)

このような順番で日本側と中国側、それぞれ5班分の発表があった。時間がオーバーしていたので、日本側の担任の先生は、ここで授業を終えることを伝えた。別れの時、日本の子どもはカメラのレンズに向かって手を何度も振りながら、笑顔で「ざいじえん」(中国の「さようなら』の意味)と言っていた。最後は Skype を切って、授業を終えた。

授業者は中国の子どもたちに、今日の活動を振り返って、「日本の子どもたちの作った漢字はどうでしたか」と聞いた。子どもたちは「すばらしい」や「面白い」などといった感想を述べた。その上で、「日本と中国のお互いの交流は大切です」と子どもたちへ伝えた。授業時間は予定より15分ほど延びた。



図6 第3時間目授業の様子

② 授業後の考察

授業の目標である「漢字について楽しく交流することができ、漢字の大切さを感じられる。お互いに理解できる」ということが達成されたのかを検討したい。まず、

「漢字を通して、日本の子どもたちと交流できましたか」という質問に対して、97.2% (47人中46人)の子どもが「良く交流した」と回答した。そして、「日本の子どもたちが作った漢字はどうでしたか」という質問については、85.1% (47人中40人)の子どもが「とても良かった」と回答した。理由の記述を見ると、「とても分かりやすい」や「発想がいい」という内容が多かった。また、「中国の漢字や日本の漢字についてもっと学習したいですか」という質問に対して、97.9% (47人中46)の子どもが「はい、もっと学習したい」と選択した。さらに、「日本についてもっと知りたいですか」という質問に対しては、97.9%の子どもが「もっと知りたい」と答えた。最後、「また時間があれば、このようなスカイプを使って、授業をしたいですか」という質問については、97.9%の子どもが「またやりたい」と回答した。以上の結果から見ると、授業の目標は達成することができたといえるだろう。

6. 授業プログラムの成果と課題

6.1. 研究の成果

日本と中国の漢字文化に関する知識を中心とし、その上、漢字に関する活動やインターネットの Skype というソフトウェアを使って、子どもたちが日中の漢字文化を知り、交流を通してお互いに理解することができるのかを検討したい。まず、日中漢字に関する学習に対する意欲は、以下の図7のような結果となった。

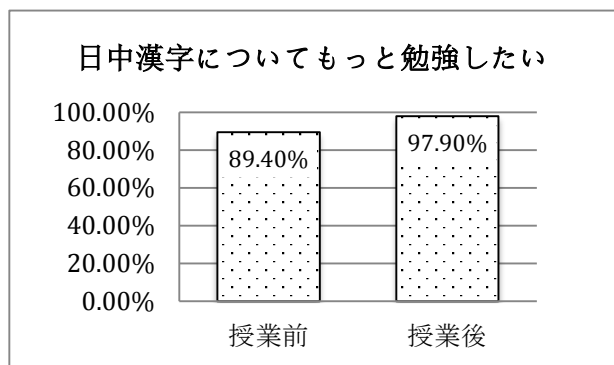


図7 日中漢字への学習意欲

また、もう1つの成果は、日本に対する印象の変化である。授業後のアンケートによると、「日本人や日本の印象について、何か変わったことがありましたか」という質問に対して、「はい、ありました」と回答した子どもは70.2% (47人中33人)であった。理由の記述を見ると、「最初は、日本人について悪い印象を持っていたが、交流した後、日本人は優しい、明るい、友好的

であるといった印象を残した」と書いた子どもが14人であった。その他「最初は堅苦しいと思ったが、ぜんぜん堅苦しくなかったです」と書いた子どもは2人であった。

授業実践の一ヶ月後、授業者である筆者は、子どもたちと連絡先を交換して、インターネットで交流することをできるようにした。そして、1人の子どもAさんにインタビューを行った。このインタビューの結果、次のことが分かった。Aさんは今まで以上に、漢字の学習に対する興味が増したという。また、新しい漢字を学習する時、漢字の歴史や文化を考えながら覚えたと言っていた。さらに、日本語や日本の漢字に興味を持っているため、日本の人と直接交流したい、といったものもあった。

6.2. 今後の課題

課題としては次の3点が考えられる。

1つ目は、日本と中国における漢字だけでなく、それに関する歴史的・文化的な影響などの理解を深め、日本と中国がどのように相互理解・交流していけばよいかということも考えさせる授業にすることである。よって、今後の研究では、日本について興味を持たせるだけにとどまらず、お互いに理解、学習し、国々の価値観を分析、思考でき、積極的に共存することができるようにするための新たな授業プログラムを生み出していく必要があると考える。漢字文化ではなく、他に国も適応できる文化や知識を題材とした授業の可能性も検討していく必要があるだろう。

2つ目は、今回の遠隔交流授業について、インターネットの接続状態がかなり不安定であったことである。情報通信技術を授業で利用するため、それに関する通信技術及び関連ソフトウェアの知識を勉強し、インターネットの安定的な接続を担保するための知識を学び、接続しやすいインターネットの環境を作っていく必要がある。

3つ目は、ある子どもが、「また時間があれば、この国際交流学習を続けたいですか」「日本についてもっと知りたいと思いますか」という質問に対して、「続けたくない」、「外国について知りたくない」と回答した点である。その子に授業を続けたくない理由を聞くと、「外国語を喋りたくない、日本語や英語は面倒」と言っていた。今後は、担任の先生からの聞き取りによって、「外国語を勉強したくない」子どもたちについて、外国語を話したくない理由をうかがったところ、その問題を解決するためには、子どもたちの個人的な情報を把握しなければならないということがわかった。個別に興味を確かめる手立てをとりながら授業を展開していく必要があると思われる。

¹ 蔡秋英 (2010)、「中国における国際理解教育の現状と課題—小学校教科『品德と社会』を中心として—」、広島大学大学院教育学研究科紀要、第二部、第59号、pp.88-89

² 「国务院关于基础教育改革与发展的决定」

<http://www.npjy.com/newsInfo.aspx?pkId=496524> (2015年1月27日閲覧)

³ 秦莉 (2014)、「中国の経済発展地域における国際理解教育の現状と課題:蘇州市工業園区における調査を中心に」、奈良女子大学博士論文、博課 甲第564号、p.42

⁴ 中国の国際理解教育カリキュラムの構造という表より作成。蔡秋英 (2010)、「中国における国際理解教育の現状と課題—小学校教科『品德と社会』を中心として—」、広島大学大学院教育学研究科紀要、第二部、第59号、pp.90

⁵ 同上、pp.90

⁶ 劉芸 (2012)、「小学開展国際理解教育的探索和实践」『素質教育』第4期(総第240期)、p.41

⁷ 秦莉 (2014)、「中国の経済発展地域における国際理解教育の現状と課題:蘇州市工業園区における調査を中心に」、奈良女子大学博士論文、博課 甲第564号、p.45

⁸ 同上、p.47

⁹ 同上、p.47

¹⁰ 陳卓君 (2013)、「中国の重慶における国際交流の開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—」、千葉大学教育学研究科修士論文、p.2

¹¹ 中国の若者、「漢字離れ」、www.recordchina.co.jp/group.php?groupid=67278 (2015年1月27日閲覧)

¹² 同上

参考文献

蔡秋英 (2010)、「中国における国際理解教育の現状と課題—小学校教科『品德と社会』を中心として—」、広島大学大学院教育学研究科紀要、第二部、第59号

秦莉 (2014)、「中国の経済発展地域における国際理解教育の現状と課題:蘇州市工業園区における調査を中心に」、奈良女子大学博士論文、博課 甲第564号

劉芸 (2012)、「小学開展国際理解教育的探索和实践」『素質教育』第4期(総第240期)

陳卓君 (2013)、「中国の重慶における国際交流の開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—」、千葉大学教育学研究科修士論文